

## 繁殖母豚管理のポイント（4） ポークランドグループ 加藤仁

### I. 授乳期母豚の状態

授乳期は母豚にとって、母乳を分泌しながら子豚を大きくして、尚且つ、自分自身の体の維持、そして発育期にある初産豚は自分自身の体の発育も兼ねて過ごしている時期です。

また、授乳期は分娩・出産という大イベントから繁殖システムの回復を図り、離乳後の発情再帰、排卵、受精、着床、妊娠維持の準備をしている時期でもあります。

### II. 授乳期の母豚管理

授乳期に必要な栄養分を飼料摂取によって十分に満たされている母豚は少ないと思った方が良いでしょう。

殆どの母豚は、飼料摂取だけでは、十分に栄養分を満たしていないので、不足分は、自分自身の脂肪と蛋白質で補い、貯金として貯えていた栄養分を取り崩しています。

ですから、殆どの母豚において離乳時は出産前よりスリムな体型になるのです。

そこで、勘違いして、授乳期に栄養分が不足するのであれば、妊娠中に沢山の飼料を摂食させて、栄養分を貯めておこうとすると、母豚は過肥となり乳腺細胞が十分に形成されず泌乳不全に陥ってしまい、逆効果となります。

不足した栄養分は、必要としている授乳期に与えて、授乳期は母豚自体が十分に摂食しなければなりません。必要としていない妊娠中に過剰に栄養分を摂食させて、貯金をするつもりでも、生理的にはそのようにはうまくいきません。人間社会でも良く言いますが、「食い貯め、寝貯め」はできないと言います。必要な時に必要な栄養分を充分与えてあげることが肝要です。

そして、授乳期の母豚の体内では、子豚へ授乳しながら、母豚はいつも寝ながらですが、すでに、次の妊娠のための、繁殖内分泌システムは動いているのです。離乳してから発情再帰があって交配をするのですが、離乳する前の授乳期にすでに、発情の準備をしていて、離乳というタイミングと同時に発情再帰を発現するのです。

ですから、人間の目には見えない母豚の体内、子宮で準備をしているのですから、授乳期は栄養分がただでさえ不足がちなため、飽食が理想です。

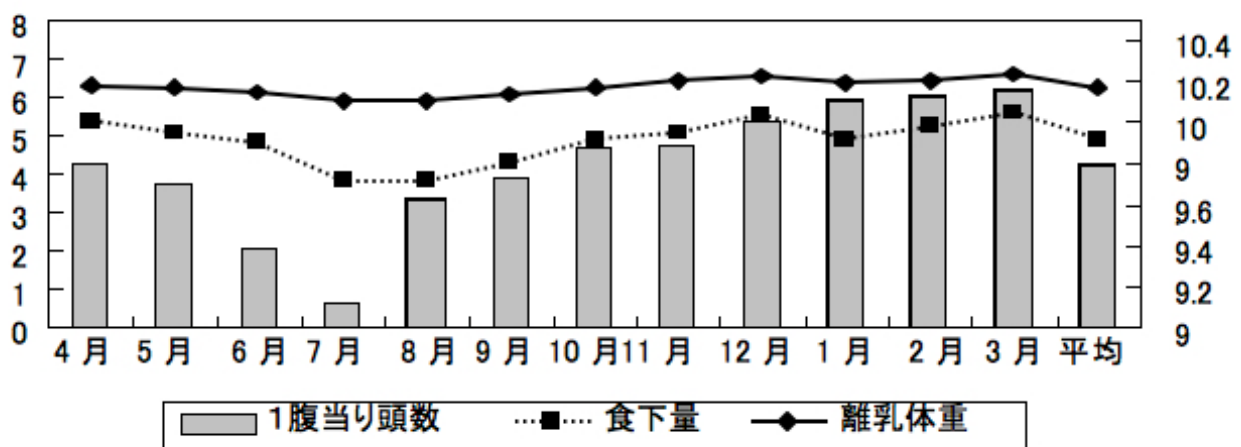


図1 B農場 15年度食下量と離乳体重

## Ⅲ.授乳期の飼料摂取量を100gでも増やすアイデア

### ①授乳期母豚の飼料摂取量の測定

母豚給餌器のカバーに記録用紙を貼り付けて、毎日記入して正確に給餌量を計測して、授乳期は一体、何キロ与えているのか確認することにより客観的な判断ができます。作業的には、結構大変な作業なので、長続きしない傾向にありますが、必要に応じて実施するとよいです。

### ②新鮮な飼料と水の給与

豚は結構デリケートですので残飼で残った飼料は、臭いが良くなく、意外と食べないものです。給餌をする前には必ず残飼料は除いて、新鮮な飼料を与えたほうが良い結果につながります。飼料摂取量と水の摂取量は比例しますので、新鮮な水が十分に与えられなければ飼料もよく食べませんので新鮮な水が摂取できる環境を作って上げましょう。

### ③ドリップクーラーによる水滴を頸部へ落とした体感温度の低下

凍結したペットボトルを母豚の頸部の真上に設置して、氷解した水滴を頸部へ落とす方法もあります。人間も同じですが、温度センサーの中心が首筋にあるので、この部分を冷やすことで体感温度が下がります。逆に、温める時は人間で首にマフラーを巻いて効率よく温めて体感温度を上げるのも同じ原理です。

### ④給餌回数の増加

一日の給餌回数を2回より3回、3回よりも4

回と給餌回数を増やす方が一日当たりの飼料摂取

量は増加します。一度に沢山の飼料を給餌しても、一回では食べきれなく、何回かに分けて食べているので、給餌回数を増やした方が豚にとっては食べやすいです。人間で「わんこそば」の様に少量ずつそばをお椀にいれてもらうと結果的には、一度に同じ量を出されるより食べやすいのと同じようなものです。

### ⑤起き上がり易い床面

食事で起き上がる時に床面が滑って起きにくいと食べなくなり、犬座姿勢のままでは飼料の摂取は困難となります。

### ⑥食べやすい給餌器、飲みやすい給水器

給餌器は深すぎないほうが良いです。飲水ピッカーは分娩柵に2ヶ所～3ヶ所設置した方が良いという考えもあります。

### ⑦妊娠期の給餌量が過多にならないような注意

妊娠中に給餌量が多すぎると、肝心の授乳期の食下量が低下して、泌乳量の低下や離乳後の発情再帰が延長することがあります。

### ⑧夏季は油脂の添加や、飼料のカロリーアップ

暑くなると母豚は食欲が低下するので、少ない摂食量でもエネルギーを加算できるように、飼料のカロリーを上げてあげましょう。(次号に続く)

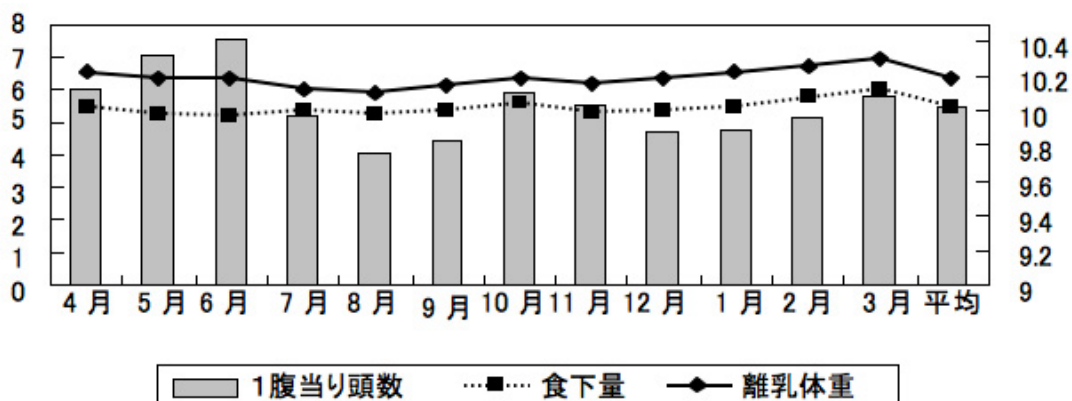


図2 B農場 16年度食下量と離乳体重